

古代の住居で暮らしてみたら...

ある停電の夜の出来事

ある夜、自分の部屋でコンピュータゲームをしていると、急に電気が消えました。停電です。エアコンが止まり、今まで暖かった部屋が急に寒くなってきました。もちろんテレビや電気コタツなどの電化製品は使えません。家の中も外も真っ暗です。どうしようもないので寝ようと思いい、布団にはいりました。電気毛布が役に立たず、布団は冷えたままです。

電気が止まるとまったく不便だなあと思いつつ、いつの間にか寝てしまいました。

翌朝、ふだんは聞こえないような鳥の声に目を覚ますと驚きました。寝ているのは布団ではなく、草やワラのの上です。まわりをよく見渡すと、床が地面から一メートル近く掘り込んであります。室内は六畳ぐらゐの広さでしょうが、その中にほくを含めて親子四人が暮らしていたのです。

屋根が地面に接しており、窓はなくつっぺんの煙出しの部分から朝日が差し込んできています。隣りに寝ていたお父さんが、起きて炉に火をつけました。建物が明るくなるとともに、だんだん暖かくなってきました。床が掘られた穴にはいつているような状態なので、冬は暖かく、夏に涼しいのです。

炉は料理に使うのはもちろんですが、暖房や家の明かりとしての重要な役目も果たしているようです。

外はよい天気です。朝ごはんを食べたあと、お父さんとお母さんはムラのたちと一緒に、田んぼの水路を作り始めました。ぼくたちはムラの子供たちと遊んだり、大人たちの手伝いをしたりして一日中外で過ごしました。

山に陽が沈み、暗くなりかけると、みんなそれぞれの家にはいりました。炉の火だけでは電灯のような明るさはありません。



竪穴住居に現在の畳を敷いてみると、四畳半から六畳ぐらゐのスペースが考えられる。

せんが家族の姿は確認できません。しかし家の中でできることは限られているので、夜はとにかく早く寝るしかありません。

今日はすごく疲れたせいか、草やワラの上が気持ちよく感じられます。横になったとたん、すぐに寝てしまいました。

次に目を覚ますと、いつもの自分の部屋で、布団の中にはいつていました。どうも夢を見ていたようです。

夢の中で古代の住居を体験したら、現代のぼくたちはテレビを見たり、漫画を見たりして家の中で過ごす時間が多いことに気がつきました。それに比べて古

代では、雨が降ったり冬のすごく寒い日などを除き、昼間はたいがい外で活動していたようです。

現代は生活の中心場所は住居にあり、そのための備品や広さが必要なのです。ところが古代の生活の中心場所はあくまでも戸外、自然の中であり、住居は寝たり、雨や寒さをしのいだりするために作られた場所に過ぎないのです。だから六畳一間ぐらゐの広さでいいのです。

そんなことを考えながら一階に降りると、いつものようにお父さんがテレビのニュースを見ているが、何か変です。ぼくも座ってテレビを見ると、大変なことが起こっていました。大地震があったのです。家がたくさん倒れ、道路や線路もめちゃめちゃ。電気、水道、ガスなども止まって、人びとの生活が大混乱しています。また、火事もいたるところで起こったようです。

竪穴住居のムラなら大丈夫だったんだろうとふと思いました。家はすぐ倒れるけど、柱以外のものは落ちてこないから、火事にさえ気をつければ、ちょっとケガをする程度ですむでしょう。家はまた自分で建て直せます。

現代はともなう便利な住居だけど、災害時の被害がとても大きく、すくには元通りに回復しないと思います。ぼくは古代の住居について、もっと調べて見ようと思いました。



稲葉和也・中山繁信『建築の絵本 日本人のすまい 住居と生活の歴史』を参考に作成

天然の住居・洞窟

島根半島の中海に面した海岸には、サルガ鼻、権現山、また日本海側には猪目などの洞窟遺跡があります。自然にできた洞窟は、縄文人の格好のすみかとなっていました。

また縄文時代、弥生時代を中心に、長いあいだ住居の中心だった竪穴住居は古墳時代以後、しだいに掘立柱建物に変わっていききました(図参照)。



サルガ鼻洞窟住居跡(美保関町森山)



猪目洞窟遺跡(平田市猪目町)



権現山洞窟住居跡(美保関町森山)

原始・古代の住居の移り変わり

縄文時代から弥生時代にかけて、すまいは竪穴住居が主体でした。洞窟は、狩猟や漁労のための季節的移動に伴う、一時的なキャンプ地として使われることが多かったと考えられます。掘立柱建物は、わずかではありますが縄文時代からあり、しだいに数を増やして、古墳時代終りごろ以降はすまいの主流となります。

